

パパだって話は尽きない

「もしかして、〇〇ちゃんのお父さんですか?」「あ、あなたは〇〇くんの…?」

共育てパパへのグループインタビューで、お子さんが同じ保育園に通う4人の男性に集まってもらったときのことです。普段、朝夕の送り迎えの際に顔を合わせることはあっても、直接会話を交わしたことはなかったという彼らは、最初こそ緊張した面持ちでしたが、共育て生活の苦勞を語り合ううちにすぐに打ち解けてしまいました。「実はこの間、こんなことがあって…」「そんな便利なサービスがあるんですか、知らなかった」「わが家ではこんなふうになっていますよ…」と、予定の時間を終えても、まだまだ話し足りない様子。別れ際、「これからぜひやりとりしましょう」と、それぞれに名刺交換をしていたことが印象的でした。

夫婦共働きの世帯数は、1990年代に片働きの世帯数を上回り、現在も増加傾向にあります。しかし、小さな子どもを育てながら共働きを続けている家庭は、全体から見ればまだマイノリティ。

特に男性の場合、自身の父親や上司・先輩にモデルを見だしにいくだけでなく、同年代のなかにも、同じ目線に立って

気軽に相談し合える存在がなかなかないのが現状のようです。冒頭の4人の共育てパパたちにとって、子育てについて男性同士で話をする機会は新鮮だったのでしょう。

インターネット上には、同じ趣味や考え方を持つ人々が集まるさまざまなコミュニティ・サイトがありますが、そのなかに、「男性の育児」に関するものもあります。掲示板をのぞいてみると、育児に関する具体的な疑問や悩みに加えて、仕事と子育ての両立や、夫婦間のコミュニケーションに関する相談など、さまざまなことについて意見交換がなされています。インターネットは、周囲から孤立しがちな共育てパパたちにとって有用なツールとなっているようです。



みんな「〇〇ちゃんのパパ」

日常生活のなかでは、「ママ友」仲間が「パパ友」づくりの後押しをしたり、保育園

や子育てサークルなどの施設側が「パパ友」コミュニティづくりを仕掛けたりといった試みもなされています。「うちの保育園はなかなかすごいですよ」と話してくれたのは、出版社に勤め、フリーカメラマンの夫をもつ杉田さん。ママ友仲間の呼びかけで、少し前から、それまで母親が中心となっていた保育園行事の準備に父親たちが参加するようになったのだそうです。当初は渋々と保育園にやってきた父親たちでしたが、会合を重ねるうちにすっかり意気投合し、それぞれの強みを活かして協力し合っているといます。「カメラマンもいれば、大工さんも、シェフもいる。それぞれのスキルを活かして力を合わせればかなりいろいろなことができるし、ここではみんな『〇〇ちゃんのパパ』。誰が偉いという上下関係もないし、利害関係もないのがいい」と話してくれました。

仕事に直接役立たなくても

同年代の子どもを育てているという共通項は、仕事上の所属先や専門性を越えて、親同士を結びつける力を持っています。共育てパパたちにとって、「パパ友」は、情報交換や相談の相手というだけでなく、普段とは異なる立場で関わり合える存在でもあるのです。前述の保育園の行事のように、本業から離れたところで、まったく違う専門の人たちと何かを創り上げるという経験は、普段の仕事のなかではなかなかないことでしょう。その経験は、直接的には仕事にプラスにならなくても、自らの持つ知識やスキルの価値を再認識したり、将来新しい発想をもたらしたりすることにつながるはず。共育てパパたちが、「パパ友」同士の関わりを楽しみ、そこから新しい価値を生み出していく存在になるのではないかと期待しています。

(わしお・あづさ)

※この連載は、ヒューマンリソース研究所の中間真一主席研究員と鷺尾梓研究員が交互に執筆します

上下関係も利害関係もないのが心地いい! 「パパ友」コミュニティ



「男たちのワーク・ライフ・バランス」

ヒューマンリソース研究所編著
幻冬舎リソース刊2008



鷺尾 梓 株式会社ヒューマンリソース研究所 研究員

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年より現職。国内外における生活価値観調査をもとに、「働く」「学ぶ」「暮らす」といった生活の基本から、未来に向けたライフスタイル・社会のあり方を探求している。共著書に『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎リソース)。